

靈的成長における超越性と共同性の問題

——アルコール依存症からの回復とAA——

鎌原利成

はじめに —— 「靈的成長」について考えるということ ——

現代では「靈的成長」「靈性」というものに関心をもつなどというと、単に逸脱的だと見なされがちであるように思われる。しかし、「魂」「神」「靈性」という言葉に魅かれ、神秘主義的なニューエイジ・セラピー、精神世界、新々宗教などに道を見いだそうという人は後を絶たない。そうした人々が望む問題解決、現世利益の中には、理性的に、目的合理的に達せられるものも少なからずあるのだろうが、どうしようもない「生きづらさ」がその根底にあることもあるだろう。理性や合理性では捉えられない領域、「靈的」とも言うべき問題が無意味ではないのは、そうしたところにあるだろう。

靈性、人間の靈的側面というのは、簡単に言うと、「私たちの自己、他者、そして宇宙との関係」（ウィットフィールド、1987=1997、p.185）、「その人が自己の生き方や命をどのように見ているかという考え方……、自己を囲む世界の認識の仕方……。何を大切に生きるかという価値意識の問題」（斎藤、1996、p.184）、つまり、「世界の中でいかに関係を結ぶか」「その関係性をどのように認識するか」ということである。本稿で取り上げるアルコール依存症は、こうした靈的側面（世界観）の歪み、未成長による病であって、ベイトソンによれば、アルコール依存症者は、「もはや無意識の深みにある認識論が、自分の意志とは無関係に変化するという靈的な体験を通してしか自分を救えない……ところへ追いやられる」（ベイトソン、1972=1987、下巻p.474）のである。回復＝「靈的成長」とは、新たな世界観、自己認識に達することなのだ（斎藤、1996、p.184）。しかも、それは認識論的变化であると同時に、存在論的变化であり、事象が自分自身の経験へと深化することなのである（ヒルマン、1983=1993、p.38）。本稿では、アルコール依存症者が、AA（Alcoholics Anonymous＝アルコール依存症者の自助グループ）の中でいかに回復していくか、ということについて、「靈的成長」という視点で捉え、回復＝「靈的成長」がいかなる超越性、共同性に関わる中で遂げられていくかを述べていくことにする。

1 依存症者の「霊的成長」 —— 「意志の力」の病からの回復 ——

1-1 AA (Alcoholics Anonymous) の活動

先ず、AAについて簡単に述べよう。AAは、1935年、アメリカで、二人のアルコール依存症者、ビルとボブの出会いによって始まった。「アルコールだけがアルコールを救うことができる」「自分を救うために、もう一人のアルコールにメッセージを運ぶべきだ」という自覚のもとにAAは生まれたのである。AAが日本に導入されたのは、1955年前後で、活動が活発化したのは、1975年頃からである。

AAの日常活動の柱は、「ミーティング」である。その中心は、アルコール依存症者本人以外は参加できない「クローズド・ミーティング」である。その時々設定されたテーマをめぐる参加者全員が順に自分の考えを述べていく。原則は「言いつばなし、聞きつばなし」であり、議論、非難、説教は禁じられている。また、もう一つの重要な活動は、「メッセージ」である。定期的に病院や施設を訪問して、入院(所)中のアルコール依存症者たちに、AAの存在とその考え方、そして自らの体験を伝えるのである。(野口、1996、pp.75-76)

AAには、アルコール依存症者本人の回復＝「霊的成長」のための「12ステップ」と、AAというグループの運営・活動の規範としての「12の伝統」がある(資料1 参照)。これについては後で取り上げる。

1-2 「支配」の病、「意志の力」の病としての依存症

依存症、あるいは嗜癖とは、根源的に欲望が充足不可能であるのに、欲望を満たそうとすればするほど欲望が昂進していき、自己破壊的に、特定の物質摂取、行為を反復することである。例えば、アルコール依存症者にとって、酒はもはや欲望を満たしてくれるものではなく、かえって飲酒によって身体的苦痛を味わい、精神的にも自己嫌悪感に苛まれたりしていく。それでも、ますます飲酒欲求は抑えられなくなり高まっていき、自己破壊的に連続飲酒してしまう。

依存症は、「支配」の病、「意志の力」の病と言われる。ベイトソンは、アルコール依存症者の「素面」の状態のあり方に間違い(エラー)があって、それが酩酊によって修正されると考える。アルコール依存症者は、自らを自分の「意識された意志」と同一視し、それを「<私であるところのすべて>からそれを取り去った残り」と対立させる(ベイトソン、1972=1987、下巻p.449)。そして、物質、他者、自分自身を、自分の「意志の力」によってコントロールしようとするのだ。アルコール依存症者は、酒に勝とうとして、「オ

レはできるぞ」と、「自己制御」のチャレンジを繰り返す。最初は、飲まないことへのチャレンジに集中しているも、やがて、「一杯のリスク」が自己への挑戦となる。飲酒という危険を冒しつつ、酒をコントロールしようということが「プライド」の確証になる。より大きな障害に挑戦することは、自分の「意志の力」の強さを示すことであるから、それで失敗しても、酒という「誘惑=障害」への挑戦は止まらない。アルコール依存症者は結局、酒に負け続けるのである。

では、アルコール依存症者を取り巻く人間関係は、いかなるものだろうか。一言で言えば、互いにコントロールし合おうという関係である。アルコール依存症者は、友人や家族から「もっと強くなれ」「酒の誘惑に勝て」と叱咤される環境にいる。それによって、アルコール依存症者の「プライド」が刺激され、先に述べた飲酒のプロセスがエスカレートすることになる。飲酒は、単に「酒に勝つ」ためだけではなく、「他者」（実在であれ架空であれ）に自分の強さを示すためになされる。たとえ、妻が、夫の酒乱、虐待に耐えて養育的に献身する場合でも、同様である。妻の献身は、夫の飲酒、夫自身に対する「支配」だからだ。アルコール依存症者の「プライド」は、そうした妻の態度に怒り、恥辱をたきつけられ、妻、家族に対し、暴力的、支配的な態度をますます強めるのである。このような家庭には安全感がなく拘束的で、極端な表現をすれば、全体主義的だとさえ言えよう。そもそも、アルコール依存症者はなぜ酒にとりつかれるようになったのか。「人と同じだけ飲もう」という、西洋文化ではノーマルとも言える飲酒習慣が、他者に「負けまい」という傾向を強めるのだ。だが、同時に、飲酒における「酩酊」は、このような他者との競争的な関係、「自己制御」をゆるめる効果をもつ。アルコール依存症者が真に求めているのは、酩酊におけるような、人間関係のなごみであり、回復とは、そのような関係性の中にくつろげるようになることである。

1-3 AAにおける回復、成長と「神=ハイヤー・パワー」

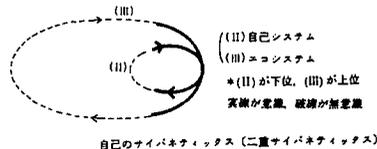
AAでは、アルコール依存症において「底突き」が回復の契機になり得ると言われている。ここで、「底突き」の意味について触れておこう。ベイトソンは、アルコール依存症者について、「プライドが、一種の^{セルフ・コントロール}“自己制御”のテストへ自分を駆り立てていくことの深い……目的は、その“自己制御”が効果をもたない、理に叶わないものだということ

を証明するためにあるとは言えまいか」（ベイトソン、1972=1987、下巻p.468）と言う。それは、アルコールに負け続けることで「自己制御」の認識論をおしつける社会通念の誤りを証明することである。それと同時に、「自己制御」に自分を駆り立てることで、「自己制御」が効果を持たないことを自覚できるということである。では、理に叶う自己の在

り方、世界観とは、いかなるものであろうか。ベイトソンのサイバネティックス認識論においては、「精神的特性は、集合の全体に内在する。全体があつてはじめて現れるもの」であつて、そこでは、「内的相互作用のシステムのある部分が、他の部分（その全体または一部）を、一方的にコントロールするような関係を結ぶことはありえない」（同、p.452）のである。それは、「人間+環境という大きなシステム」であり、「システム自身が自己修正する自己言及的システム」（亀山、1988、p.239）⁽¹⁾なのである。「意志の力」による「自己制御」の限界を体験して、それを超えたいと真に願うとき、アルコール依存症者は、このような、自己を包摂するより大きなシステムを体験しうる。この「より大きなシステム自体」「より大きなシステムにおける情報の流れそのもの」が「神=ハイヤー・パワー」ではないか。ベイトソンは、「通常の“自己”と理解されているものが、「試行錯誤のシステム」全体の、ごく小さな一部でなのであり、思考し行動し決定するのは、この大きなシステムである」（ベイトソン、1972=1987、下巻p.474）⁽²⁾と述べているが、この点は、AAの、自己を超えた「神=ハイヤー・パワー」の発想に通じているという。「より大きなシステム」「神=ハイヤー・パワー」の体験は、「溶解体験」⁽³⁾としての神秘体験、忘我の体験となることがある。それは、全体システム、または、部分であるシステム同士が会ったとき、「お互いを、このような〔包みこむ〕システムとして感応しあう」（同、p.475）ということである⁽⁴⁾。AAメンバーの誰もがはっきりとした神秘体験をするわけではないし、また、「底突き」体験、神秘体験が、即、世界観の転換——回復、

⁽¹⁾ベイトソンは、相互因果モデルを、一連の情報（差異）の変換と考え、木を切る例を挙げて、次のように説明する。「きこりが、斧で木を切っている場面を想定する。斧のそれぞれの一打ちは、前回斧が木につけた切り目によって制御されている。この自己修正的——すなわち精神的——プロセスは、木—目—脳—筋—斧—打—木のシステム全体によってもたらされるのであり、このトータルなシステムこそが、（超越的ではなく内在的な）精神の特性を持つのである」（ベイトソン、1972=1987、下巻p.455）。自己修正的であるという意味は、この例で言えば、「先につけた木への切り口が、筋肉—斧などの動きを変えて、別な切り口をつけるというように作用するわけである。前回が次回を次回が次々回をとという具合に、動作の変化が流れてゆく」（亀山、1988、p.240）、差異が次の巡回、また次の巡回へと変換される過程のことである。精神を持つ木を切る主体と、切られる対象としての木を分けて、「きこりが木を切る」ではないのだ。

⁽²⁾亀山佳明がパーソナリティーの二重のサイバネティックスを図示したものを挙げておこう。



これについて、亀山佳明は、「部分自己は自己システム全体を変更しえないのと同様に、自己システムは全体（エコ）システムの変更をなしえない。逆にいえば、部分は常に全体を通して調節される」（亀山、1988、p.245）と言う。

「霊的成長」につながるわけではない。「底突き」は、回復のきっかけでしかなく、回復自体、徐々になされる変化である。

回復の過程で重要とされるのが、自己の「無力」の認識である。それは、アルコールに対する「無力」の認識（12ステップ：1）、「神＝ハイヤー・パワー」に対する「無力」の認識（「神＝ハイヤー・パワー」に自己を委ねること）（12ステップ：2、3）がその核である。その上で、自分の生き方の誤り、短所を直すことを「神＝ハイヤー・パワー」に委ね、自分が傷つけた人への埋め合わせをするのである（12ステップ：4～10）。こうして、他者と「神＝ハイヤー・パワー」への謙虚さを求めていくのである。そして、神との意識の触れ合い（12ステップ：11）、霊的目覚め（12ステップ：12）を遂げていくのである。その過程は、一人だけで成し遂げられるものではない。AAのミーティングの中で、「語る」、「共感する」ということが不可欠である。そこで、互いをコントロールしない「我－汝」関係において現れる「神＝ハイヤー・パワー」が臨在するのだ⁵⁾。そして、自分がたどった成長をまだ酒に溺れている仲間伝えることが、回復・成長を更なるものにし、素面を維持するために必要だとされる。

³⁾「溶解体験」とは、自己と他者、外界との境界の喪失、対象と自己との融合、忘我の体験であり、「個人的アイデンティティがすべての関係のプロセスへ溶出した世界」の体験である。そこで、「わたしは存在する」という自信、「存在するという確信」をもてるのである（作田、1993、p.37, pp.92-93）。「溶解体験」は、「回心」のために重要な契機であるが、すべての「溶解体験」が必ずしも回心につながるわけではない（織田、1990）（鎌原、1997）。

ここで、AAの創始者であるビルの神秘体験について触れておこう。

「彼は泣きながら乞うた。『神様、おられるなら姿をお示し下さい』。その直後に起こったことは衝撃的だった。『突然部屋が言いようもない白い光りに燃え上がった。形容を絶する恍惚の感じに包まれた。……それから、心の目の中に山が見えた。私はその頂点に立っていて、そこにはすさまじい風が吹きすさんでいた。空気の風ではなく魂の風だった。偉大な澄明な力で私の中を吹き抜けて行った。その時、“お前は自由だ”という考えが燃え立つように沸いてきた。……』

この日以来、ビル・Wは神の存在を身近に感じるようになり、飲まなくなった。……」（『Past it on』第5章）（斎藤、1995b、p.23）。

⁴⁾ベイトソンは、そのことについて具体的に、「森を散歩する私の目にその「美しさ」が捉えられるということは、個々の木も、森全体の生態系も、ともに〔部分と全体との相補性に立った〕システムだということに私が感応したこととイコールである」（ベイトソン、1972=1987、下巻p.475）と述べる。

⁵⁾ベレンソンは、霊性について論じた際（Berenson, 1990）、霊性の発達段階の究極として、M. プーパーのいう「我－汝」関係、人間関係に現れる霊性を取り上げ、AAの12ステップ・プログラムは、このシステムに沿ったものだとして主張した。そして、ベレンソンは、「関係は個人と聖なる存在のあいだ、個人どうしのあいだ、フェミニンとマスキュリンのあいだ、そして人間と最高の存在のあだに現れるものである」（ベレンソン）（ペプコ編、1991=1997、p.85）と述べる。ベイトソンも、「『私』と『あなた』が語りあうとき、ふたつのシステム間で起こる美的感応の現象は、もっと大きな驚嘆に値する」（ベイトソン、1972=1987、下巻p.475）と述べている。

1-4 AAの共同性と12の伝統

ここで言う全体システムへの感応は、「全体主義」につながるのではないかという疑問が沸くかも知れない。ただし、AA自体が「神=ハイヤー・パワー」というわけではない。AAメンバーにとっては、AAの良心を通して「神=ハイヤー・パワー」が現れるのである。最終的権威は「愛なる神」（12の伝統：2）のみである。最終的権威といっても、「神=ハイヤー・パワー」が、一方的にAAというグループ、AAメンバーを支配するのではない。しかも、AAにおける「神=ハイヤー・パワー」とは、「各人が理解する神」であって、一つの特定の神概念、ドグマに拘束されることはなく、個々人の個性が尊重されている。更に、これによって、「神=ハイヤー・パワー」が「ひとつの個人的存在として、それぞれの人間と親密に結ばれていると感じられる」（ベイトソン、1972=1987、下巻p.475）のである。これが、AAを制度的宗教と分かつ点である。こうして個々人の個性を尊重すると同時に、AAには「匿名制の原則」がある。「匿名制」などというと、個々人が集団の中に埋没してしまうのではないと思われるのであるが、実はそうではない。アルコール依存症者は、そもそも、「名」、世間的な名誉といったものに囚われやすいという。AAというグループ自体に関しても、AAメンバー個々人に関しても、名誉欲、金銭欲にかられると、AAの本来の目的である「ソプラエティの達成、維持、靈的成長」を忘れてしまう危険性が強いのである。「匿名制の原則」があることで、各個人は、そうした「AAの原理が優先すべきこと」（12の伝統：12）を思い起こし、「名」でなく、「神=ハイヤー・パワー」によって自己の存在価値を感じ、「宇宙とか時間の流れ……大きな世界の中の個」（斎藤、1988、p.66）を生きることができるのだ。しかも、AAというグループ自体も、それ自体は「権威を持たない」し、「リーダーは奉仕を委された僕にすぎず、決して支配しない」（12の伝統：2）のである。こうしたことが守られ、AAがカルト教団におけるような権力のヒエラルキ的集団にならずに済んでいるのは、AAそのものの組織化が戒められているからである（12の伝統：9）。

斎藤学は、ハイヤー・パワーについて、「「ありのまま」のあなたが、あなたを救うということ」（斎藤学）（ベプコ編、1991=1997、p.xiii）だと述べている。ベイトソンのサイバネティックス理論における「環境+人間のシステム」、「より大きな全体システム」は、ある切り離された「部分」によってコントロールされているものではないので、まさにそれは、「自然」「あるがまま」であって、その中に存在している個々人、集団を「自然な流れ」の中で、「あるがまま」に存在させているのだろう。

2 「暴力的な神」と「愛なる神」

しかしそれでも、AAへの参加はAAへの依存であって、依存症と紙一重なのではないか。AAの言う「無力」、「神＝ハイヤー・パワー」への帰依とは、人々の「我」を奪うだけのカルトと紙一重なのではないか。このような疑問や批判がある。本章では、ジラルの模倣的欲望理論、供犠論を用いて、依存症やカルト的全体主義における超越性、共同性と、それを超越して、症状や人間関係の回復をもたらす超越性、共同性について両者を比較し、そして、両者の連続性について述べる。これは単なる自助グループ論にとどまらず、超越性、共同性に関するより根本的な議論となろう。

2-1 依存症としての模倣的欲望と「暴力的な神」

では、ジラルの模倣的欲望とは、どのようなものか。簡単に述べよう。欲望の主体は、自発的欲望をもっているのではなく、他者をモデルとして他者の欲望を模倣しているに過ぎないというのだ。しかも、その他者は、主体の欲望の実現、欲望の対象の獲得を邪魔するライバルともなる。模倣的欲望の主体が本当に欲しているのは、実は対象の獲得自体ではなく、模倣的欲望の媒体（モデル＝ライバル）に打ち勝つことである。「モデル＝ライバル」に打ち勝てる自己の「自尊心」「虚栄心」を求めているのであり、かつ、「自尊心」「虚栄心」が、ますます模倣的欲望をエスカレートさせる。しかし、その「自尊心」「虚栄心」は、「ありのままの自己」を受容できる「自己肯定感」に支えられたものではない。であればこそ、欲望が他者、「モデル＝ライバル」に規定、支配されたものとなるのである。それは、結局、他者に依存して「自尊心」「虚栄心」を支えているということである。「《普通の》欲望では、障害をうみだすものは模倣であった」のに、それが段々、「障害の方が模倣をうみ出す」（ジラル、1961=1971、p.196）という状態になっていき、失敗、自己破壊的であること、欲望充足の困難それ自体が、欲望を強めるのだ。しかし、欲望充足は、ますます困難になっていく。「乗り越え難い障害（を乗り越えられる他者）」「全てを支配できる神」を、自分の「モデル＝ライバル」にしているという「自尊心」「虚栄心」が、前章に述べた依存症の自己破壊的なプロセスに人を陥らせるのである。全能な支配者としての神を「モデル＝ライバル」として、「自尊心」から酒をコントロールしようとしては酒に負けるというのがアルコール依存症だと言えよう。

では、模倣的欲望の主体、依存症の自己における超越性、つまり「全てを支配する神」「意志の力」が支配する共同体とはいかなるものだろうか。ジラルの供犠論によれば、模倣的欲望は、共同体を相互暴力に陥らせるという。模倣的欲望の対象をめぐる、「モデル＝ライバル」同士が対立し、段々欲望の対象自体はどうでもよくなってゆき、相手に

対する支配力を欲望するようになり（自虐的な形になっても）、人間同士の相互暴力となる。こうした暴力は模倣的欲望の作用であるから、この相互暴力自体、模倣的であり、共同体内に伝染する。すると共同体は、成員同士が相互に暴力、殺人の報復をし合うという危機に陥りかねない。こうした危機は、生贄に対する「全員一致の集合暴力」によって解消され、しかも、そこで殺された生贄が、今度は神として祭り上げられ超越性、規範を司るようになり、秩序を回復する。こうして生まれた神は、共同体に対し、新たな犠牲、生贄を求め、再び、供犠、生贄の殺害の儀礼が行われるのである。それは、原初的秩序の形成における創始的暴力の模倣的反復としての集合暴力である。作田啓一は、これを「反復的供犠」と呼び、その供犠によって再建される秩序は、常に以前のそれと変わらないのだという。

こうした共同体は、「全員一致」から生み出された「暴力的な神」によって、拘束的で「全体主義的」に支配されている。そうした支配によって相互暴力が抑制されているのだが、潜在的には相互暴力の危機は常にあるのである。表面上、全体主義ではなく個人主義的社会であるとしても、「暴力的な神」は個々人に内在化されるよう支配が働いている社会であれば、こうした相互暴力、全体主義の危険は常にあると考えられる。

2-2 模倣的欲望の超越と「愛なる神」

では、模倣的欲望、相互暴力、全体主義を超越した超越性、共同性があるとすれば、それはいかなるものであろうか。まず、模倣的欲望から「回心」する過程を簡単に述べよう。

模倣的欲望の帰結は、死、非生命、自己破壊である⁽⁶⁾。「自尊心」は、最終的には、模倣的欲望自体を否定した「虚無」そのものを崇拜の対象とし、生の感覚が麻痺するに至るからだ。しかし、そうした「底突き」において、「回心」が起こることがある。

「自己の絶望と虚無を真正面にみつめ」（ジラール、1961=1971、p.326）ることによって、「模倣的欲望、神性の断念」「自尊心の放棄」がなされ、「他人による欲望が自己自身による欲望に、偏流した超越性が垂直的超越性に、場所をゆず」（同、p.66）って、「神に向かつての魂の跳躍」（同、p.326）が実現されるのである。それは、他人を「モデル＝ライバル」（偏流した超越性）にして結果的に他人に隷属してしまう奴隷状態を放棄し、自己と遠く離れた絶対的な超越者（垂直的超越性）に帰依することである。模倣的欲望が形成する関係性では、「モデル＝ライバル」同士で、羨望、恨みなどの感情が渦巻くこと

⁽⁶⁾ジラールは、アルコール、麻薬、激しい肉体的苦痛、性的放縦などにおける、非欲望、感覚・欲望の麻痺の側面も指摘する（ジラール、1961=1971、p.302）。

になる。しかし、超越者が十分遠い所に位置する場合、その超越者、例えば、神は、「対等に敵対する対象とは、現れない」（大澤、1991、p.44）で、「一切に対する同等な関心」をもつ「憧憬の対象」（作田、pp.10-11）となりうる。ジラールにとって、こうした憧憬の対象としての超越者（垂直的超越性）とは、イエス・キリスト、「父なる神」である。イエス・キリストは、模倣的欲望がなく、魅惑的な敵対者、報復者（モデル＝ライバル）になることがない「非暴力の神」であり、「（反復型の）供犠」における「暴力的な神々」のサディスティックな超越性を更に超越した、愛の「超超越性」^{スコットランサンダース}をもった存在である。では、キリストの垂直的超越性、「超超越性」は、いかにして与えられるのだろうか。

ジラールは、キリストの受難は、前節で述べたような意味での「供犠」（全員一致の集合暴力）の犠牲ではないと考える⁷⁾。むしろ逆に、相互暴力や（反復型の）供犠がなされないよう願って、愛の要求からなされた自発的犠牲だという。それは、作田啓一の言う「再生型の供犠」に当たる。それは古い秩序の回復ではなく、「犠牲」が人々の罪を贖い赦すことで新しい秩序、共同性を形成する供犠である。「殺さないために自分のいのちを投げ出すこと、そうすることによって殺しと死の悪循環から抜け出すために自分のいのちを投げ出すこと」（ジラール、1978=1984、p.349）なのである。それは、「いけにえとなるはずの者（キリストはその身代わり）の罪をとがめる神の言葉に従うための死ではない。それは、……無辜の者を殺してはならないという新しい価値観を社会にもたらすための死である。……罰する神の言葉ではなく愛する神のこぼれを弘めるための死」（作田、1988、p.90）である。

では、こうして「愛なる神」への帰依、イエス・キリストの模倣がなされる共同体の共同性とは、いかなるものであろうか。まず、イエス・キリストは模倣的欲望の「モデル＝ライバル」となり得ない絶対的超越者（垂直的超越性）であるので、そこでは、個々人にとって、具体的な他者が敵対者、報復者（モデル＝ライバル）として立ち現れなくなる。それと同時に、イエス・キリストは暴力がなされないよう願って命を投げ出した存在であるから、イエス・キリストへの帰依は、暴力放棄そのものでもある。ジラールは、相互暴力の危機について、「無条件の暴力放棄」のみが唯一の解決策であると結論づける。相互暴力においては、誰もが、暴力をそれ自体正当な報復だと認めている以上、皆がそれぞれ

⁷⁾ジラールが、キリストの受難を「（反復型の）供犠」と定義するのを拒否するのは、ジラールが、「磔刑を神性の「原因」と考えるよりは、それを神性の「結果」と考えた方がいい」（ジラール、1978=1984、p.380）と思うからである。「反復型の供犠」では、集合暴力によって殺された生け贄に、後から聖性が付与されるが、キリストの場合は、神としての愛ゆえに自ら犠牲になったというのだ。

暴力を放棄するのではない限り、復讐につぐ復讐……の連続から人間は逃れられないからだという。だが、イエス・キリストへの帰依（模倣）、暴力放棄がなされれば、人間同士の「兄弟愛」に満ちた「神の国」が実現されるという。これがジラルルの理想なのだ。

2-3 「暴力的な神」と「愛なる神」の連続性

——模倣的欲望、暴力の絶対的放棄の困難——

しかし、ジラルルの「キリストの模倣」「絶対的暴力放棄」といい、AAの12ステップにおける「神＝ハイヤー・パワー」「無力さ」といい、それが、そのまま模倣的欲望、あるいは、依存症の根本的解決になるのかということ、全く疑問がないわけではない。まず、ジラルルの絶対的暴力放棄について検討してみよう。

本稿では、ここまでジラルルに従ってキリストの受難が「再生型の供儀」であって、全員一致の集合暴力としての「供儀」ではないとして論を進めてきた。しかし、キリストの死が「反復型の供儀」的な死であったという可能性も否定しきれないのではないかという疑問もある。作田啓一は、キリストの死における〈いけにえとしての死〉の側面を無視しない。「反復型の供儀」としてのキリストの死は、「罪を犯したとみなされる人びとの身代わりとなり、無辜でありながら彼の罪を償うために死ぬという意味」（作田、1988、p.89）である。そして、「デュルケムふうに、神を社会の象徴とみなすことが許されるなら、キリストの死を含むいけにえ一般の死は、相互暴力を共同暴力に転換して秩序を回復する」（同、p.90）という機能をもつというのである⁽⁸⁾。これは全員一致の集合暴力としての「反復的供儀」のことに他ならない。このように、キリストの死に関しては、「反復型の供儀」、「再生型の供儀」のどちらとも解釈しうるのだ。また、どちらを選ぶかは信念、信仰の問題とさえ言える。また、竹内芳郎は、キリストの受難が（反復型の）「供儀」であることは、聖書から読み取れることであること、そして、キリスト教の歴史、欧米の歴史が暴力に満ちていた点を指摘している（竹内、1986、p.234、p.236）⁽⁹⁾。

ここで、キリストの死が「再生型の供儀」なのか、「供儀」「反復型の供儀」なのかど

⁽⁸⁾中島道男は、デュルケムの儀礼論における集合的沸騰に、ジラルル的な意味での「供儀」のメカニズムが存在することに注目する。「集合的沸騰はなぜ<全体>性をもたらすのだろうか。……ジラルルのデュルケム解釈を聞いてみよう。「デュルケムの直観を完全なものにするためには、宗教的なものが贖罪のいけにえにほかならないことを理解しなければならない。それは、自らのまわりで、自らにたいして成立する集団の統一を創り出す贖罪のいけにえにほかならないのである」（傍点中島道男）とある。これは、贖罪のいけにえを排除する瞬間に、贖罪のいけにえを除く成員全体に全員一致現象がみられる、という主張である。供儀のメカニズムによるこの全員一致こそが<全体>性をもたらす。……集合的沸騰にも供儀のメカニズムが介在していることは言うまでもない」（中島、1993、p.35）ということである。ここでの<全体>性とは、全員一致、全体主義という意味合いと捉え、ペイトソンが言うような自然のシステムの全体性とは異なる意味と捉える。

明らかに決めることはできないとしても、両者に連続性があるということは言えそうである。しかも、ジラール自身、愛の神による「再生型の供犠」も、暴力的な神による「反復型の供犠」も、「両方とも互いに文化的な差異を排除するものである以上、相方の構造がきわめてよく似ているのは当然で……だからこそ人は一方から他方へ、ほとんど瞬間的な転向によって移ることができる」（ジラール、1978=1984、p.354）という点を認めている。愛は暴力と同じように差異をなくしてしまうものだというのだ。

ジラールは、模倣的欲望、模倣的相互暴力の伝染による差異喪失の状態について楽観的に、「状況が絶望的であればあるほど、相互の暴力の愚かしさが目だつようになり、人々が預言者の告げることばに耳を傾ける機会も多くなっていく」（同、p.326）と考えている。しかし、デュピュイは、「模倣の支配から抜け出すのがもっとも困難である（もっとも容易なのではなくして）のは、模倣がもっとも爆発状態にある瞬間」（デュピュイ、1979=1990、p.296）であって、模倣の力に圧倒されている人間が、どうして自由に理性、認識を働かせて、模倣的欲望、相互暴力のメカニズムに気付き、イエス・キリストを模倣できるのか、とジラールを批判している⁽⁹⁾。模倣のメカニズムの中で、模倣的欲望、相互暴力が伝染し、「暴力的な神」が支配する共同体が、そう簡単に「愛なる神」に帰依する共同体になるわけではないというのだ。

2-4 AAの全体性と、全体主義

キリストや父なる神が非暴力的な「愛の超越性」の側面だけでなく、「（反復的）供犠の神」「暴力的な超越性」の面をももっているとしたら、AAにおける「神＝ハイヤー・パワー」にも同様のことが言えるのであろうか。

ベイトソンは、AAの各人が「ハイヤー・パワー」と結ぶ関係の質と内容とが、AAの社会構造を映し出している点を指摘し、「人間と共同体との関係が、人間と神との関係に重なるという意味で、このシステムは、全体としてデュルケーム的な宗教を体現しているといえそうだ。——「AAはわれわれのうちの誰よりも、大きな力である」（ベイトソン、1972=1987、下巻p.476）と述べている。ここでベイトソンが言う「デュルケーム的宗教」というのを、ここでは、先に述べたように「神は社会（集団）の象徴であり、相互

⁽⁹⁾しかし、ジラール自身も、現実のキリスト教が、キリストの死に関して「供犠的解釈」をとってきたことを認め、そうしたキリスト教は、現代の無神論について責任があるので減じるべきだ、と言っている（ジラール、1978=1984、pp.382-383）。

⁽¹⁰⁾デュピュイは、「暴力の反対は愛ではなく、行動と言葉であり、……、人間が協同して語り、行動するときに獲得する力」（デュピュイ、1979=1990、p.123）だと言っている。

暴力を共同暴力に転化することで社会（集団）の秩序が回復される」という意味で捉える。とすれば、AAの「神＝ハイヤー・パワー」も「暴力的な超越性としての神」でもありうるのである。

また、ベイトソンはAAのシステムにおいて、自然界の精神システム（家族、森林など）と大きく異なる点を指摘する。それは、AAのシステム全体をデュルケーム的宗教にしている点でもある。すなわち、それは、「アルコール中毒に苦しみ、それを必要としている人たちに、AAのメッセージを届ける」という最高度に達せられる状況を目差すわけで、この点AAは、ゼネラル・モーターズや西洋諸国と変わらぬ、粗暴な目的追及組織である」（同、pp.478-479）という点である。AAは確かに、「その「単一の目的」が、システムの外へ向けられ、しかも、より大きな世界との非競合的關係を目差すものである点、AAは他の「営利」団体とは、大きく性格を異にする」（同、p.479）のではあるが、それでも、12の伝統が形骸化してしまったら、AAは全体主義的な組織に陥ってしまう可能性がないとは言い切れない。

先程、われわれは、いかに、12ステップや12の伝統に全体主義を思わせる記述があっても、AAは（少なくとも理念的には）全体主義ではないと考えた。しかし、そもそもAAなどの依存症者の組織は、根本的に全体主義（または欲望の模倣の応酬、支配－被支配をめぐる争い）に陥る潜在的危険性を秘めているように思われる。しかも、デュピュイが指摘したように、模倣的欲望に囚われた集団において、成員同士の敵対関係が激化した場合に、——生け贄の犠牲によって集団が救われるという可能性がある一方——カタストロフィーが起こる危険性もあるのである。つまり、集団の「底突き」がそのまま、集団の崩壊となりうるわけである。

そもそも、依存的性格は、ジラールのな全体主義社会の成員の特徴である⁽¹¹⁾。斎藤学は、全体主義について「それは寂しい者たちにとってこそ必要なもので、そうした者たちが他人を巻き込んで誇大的な自己中心主義を実現しようとするお祭り騒ぎ、つまり嗜癖の一つにすぎない」（斎藤、1988、p.66）と述べている。アルコールによる酩酊によって体験される誇大自己は、全体主義における肥大化した自己愛、他者の「我」を奪う万能感に通じるものである。もし、「無力さ」を自覚しようとし、「神＝ハイヤー・パワー」へ帰依しようという自分に過剰に「プライド」をもって、「無力」の自覚を他者に無理強いするようなことがあれば、もはや、そのグループは自助グループではなくカルトである。

⁽¹¹⁾フロムも、『自由からの逃走』（フロム、1941=1951）において、全体主義を支える依存的でマゾヒスティックな「権威主義的性格」について論じている。

3 「あるがまま」の自己の成長としての「霊的成長」

——「祈り」の実践——

ここまで、「霊的成長」をもたらす超越的存在、「神＝ハイヤー・パワー」と共同性について考察を重ねてきた。先に、「神＝ハイヤー・パワー」とは、存在を「あるがまま」に育み、存在させる全体性（関係性）、「自然な流れ」とでも言うべきものであると述べた。私は、「神＝ハイヤー・パワー」の体験は、まさに、生命感あふれる「溶解体験」であり⁽¹²⁾、「霊的成長」とは、懲罰的な規範を司る「超越性」をも超えた愛の「超超越性」に自己をゆだねることなのだ、基本的には考える。AAでは「名を隠すことこそ、われわれの知る最大の自己犠牲」（ベイトソン、1972=1986、下巻p.477）と言われるが、それは「再生型の供犠」における「愛なる神」（イエス・キリスト）の模倣と言える。生命感あふれる溶解体験において、もはや、個人の「名」や「意志の力」など意味を失っている。私は、「神秘体験について知的に探求し、意味付けする」必要がある、そして、「AAの「神＝ハイヤー・パワー」とは、「溶解体験」の意味付けでもある」と述べた（鎌原、1997）。それは、この「神＝ハイヤー・パワー」によって、生命ある「あるがままの存在」として自他の存在が関係づけられているという認識のことである。

しかし、それは、単に自分の「意志の力」「プライド」「暴力性」を否認、否定することではない。むしろ、「暴力的な神」と「愛なる神」の連続性を受容し、自らが「意志の力」「暴力性」を取り除くことができないことを受け入れることである。そうでなくして、「あるがまま」の自己を受容することはできないはずである。「謙虚さ」が美德、規範となってナルシスティックな「プライド」を支えてしまう危険を認識し、「【意志の力】を除くことに対して【無力】である」ということを自覚することが、「謙虚さ」ではないだろうか。AAでは、アルコール依存症自体を「神＝ハイヤー・パワー」の一つの現れとしてとらえている（同、p.476）。「意志の力」「暴力性」すら、「あるがまま」の自己を受容するのに必要な教師だと言えるのではないか。

⁽¹²⁾自己の生命性としての欲望を肯定する「理想自我」を志向するベクトルにおいて、生命感あふれる「溶解体験」が体験できるのだが、その「理想自我」は、サディスティックな超越性（超自我）を、さらに超越したものである（鎌原、1997）。ジラルが言うようなキリストの愛なる「超超越性」は、ここで言う「理想自我」に当たるだろう。また、作田啓一の言う、「育成する他者」も、「ありのまま」の自己を肯定する存在だと言えるだろう。〈育成する他者〉は、「自己の中に成長のルールを発見し、そのルールに即して自己を成長させようとする他者」（作田、1993、p.53）であり、「〈育成する他者〉と出会う時、人は自分という存在の全体が許容されていると感じ、それまでの自分自身の定義以上のものであると感じる」（同、p.56）のだという。

それは、個人についてのみならずAAという集団にとっても同様である。AAは確かに絶対的とも言える規範や、目的を持つ集団である。しかし、「組織化してはならない」という規範に見られるようにそれは、全体主義化、カルト化を防ぐためのものである。また、先に述べたようにAAには、「まだ苦しんでいるアルコール依存症者にメッセージを運ぶ」という粗暴な「目的追求組織」という面がある。しかし、それはAAの組織化、組織拡大のためになされるのではない。しかも、この「メッセージ運び」のためには、AAは非組織的であった方が合目的だという。組織運営上の問題に、余計なエネルギーを費やさずに済むからだ。つまり、AAにおいては、「意志の力」が「意志の力」から自らを解放しながら、仲間との関係が作られる。言ってみれば、「暴力的な神」が「愛なる神」に奉仕しているのだとさえ言えよう。

こうした認識、実践を深めるには、「祈り」が不可欠であろう。ベイトソンは、「祈り」を治療的ダブル・バインドととらえている。ベイトソンは、「部分対全体の関係が与えられんことを祈るとき、その祈りはすでに実現されている。……メンバーは、「謙虚さ」というような個人の性格が授かるよう祈るのだが、そう祈ること自体、すでに謙虚な行為であるわけだ」（ベイトソン、1972=1987、下巻pp.477-478）と述べる。「祈り」とは、嗜癖的とも言える模倣的欲望、アルコールへの依存では真に満たされることのなかったアルコール依存症者が、自ら求めれば、求めるもの（「謙虚さ」）を得ることのできる営みである。しかも、「各自それぞれに理解する神」への「祈り」であるから、これは、トートロジカルな「自己肯定」の行為なのである。ここで、AAの「平安の祈り」について言及しておこう。

神さま私にお与えください
 変えられないものを受け入れる落ち着きを
 変えられるものを変える勇気を
 そしてその二つを見分ける賢さを

ベイトソンによれば、「ダブル・バインドは、ある状況にはりつくしかないという、ひとつの選択不可能性の極み」（同、p.478）である。ここまで見てきたように、依存症もダブル・バインド状況であるが、この「平安の祈り」は、「選・択・の・清・澄・性への祈り」（同、p.478）である。このように、「意志の力」の「無力さ」を認め、自ら理解する「神＝ハイヤー・パワー」に祈ることは、単なる自己否定ではなく、謙虚な自己肯定、選択肢を得るという意味での自己の解放なのである。

では、「変えられないもの」「変えられるもの」とは、何だろうか。「変えられないもの」とは、例えば、「他者」、「自分の飲酒欲求」などである。「私は妻のせいでアル中になっている」と思っている、依存症者は妻を変えようとしてはならず、受け入れるほかない。自分の飲酒欲求に関しても、これを否認せず、「自己の全体が「アル中パーソナリティ」」（同、p.448）であることを認めることである。「そういう自己が、アル中と「戦う」などということは、それ自体矛盾」（同、p.448）なのである。では、「変えられるもの」とは何であろうか。例えば、「みずからのうちに生じた飲酒欲求に傷つき、たじろぎ、罪悪感をもつ自分」「そうした自分を責め、圧殺しようとして開始されている心の中の闘争」（斎藤、1995b、p.63）である。つまり、自分の「意志の力」で自分も他人も「変えられない」。自分や他人を変えようという支配的な態度は「変えられる」ということである。これは、言うならば、「神＝ハイヤー・パワー」によって生かされている「あるがまま」の自己、他者を受け入れられるようにと、「神＝ハイヤー・パワー」に祈るということである。

ということは、「プライド」に溺れた他者から、「無力さ」「謙虚さ」「神＝ハイヤー・パワー」への帰依を強いられた者は、それに対して「ノー」を言ってもよいだろう。他者から支配される怒りそのものを否認することはない⁽¹³⁾。「ノー」と言うことが、自分の自己肯定感を守り、集団のカルト化防止にもつながる。しかし、どこまでが、他者から支配、強制を受けていることに対する「ノー」なのか、どこからが、「自分は、自分の『意志の力』で自分を変えられる」という「プライド」から言っている「ノー」なのか。これを見極める賢さ、「変えられるもの」と「変えられないもの」を見極める賢さとは、「祈り」をもって「あるがままの自己」の声に静かに「謙虚に」耳を傾けるという営みそのも

⁽¹³⁾ベレンソンは、AAとその他の12ステップ・グループについて、「現実的には、最終的には女性が男性的権威にへつらうように勧めている。AAの12ステップは、われわれが理解した神を述べているのであって、12ステップを実行する女性は、自分が被った損傷に対して改心するように要求される」（ベレンソン）（ペプコ編、1991=1997、p.86）と批判している。

また、ベレンソンは、マスキュリンな「意志の力（ウィル・パワー）」とは異なった、フェミニンな「パワー・オブ・ウィル」がエンパワメントに必要だと主張する。前者は、「形式を修正し続ける能力」で「情緒を締め出したり、否認したり、抑圧しようとするもの」ものであるが、後者は、「情緒を包含し、許容し、抱擁しようとするもの」で、「可能性を創造する能力」なのだという（同、p.83）。嗜癖からの回復過程とは、「意志の力（ウィル・パワー）」から、「パワー・オブ・ウィル」への移行であり、「無力さ」は、両者の中間点——コントロールとエンパワメントの中間点——にあるのだという（同、p.81）。

ベレンソンによると、メロディ・ビーティが12ステップのステップ8に「私たちが傷つけた人、私たちに悪いことをした人」のリストを加えることを勧めたりしていることなど、女性が自分達に合うように12ステップを利用し始めている動きがあるという（同、pp.88-89）。ベレンソン自身も、現代に、そして女性にも相応しい形の「新しい12ステップ」を作った（同、pp.89-90）（本稿、資料2）。

ののこではないだろうか。こうした実践を日々積み重ねるプロセス自体が、「霊的成長」と呼べるものだろう。

おわりに

ここまで、AAについて色々と言及してきたが、アルコール依存症者が全てこのような論理で動いているわけでもなく、AAが他の共同体と比べて絶対的に正しい在り方であるということも言えない（ベイトソン、1972=1987、下巻p.481）。まして、制度的宗教としてのキリスト教が絶対的であるわけでもない。それでも、依存症の問題が、現代社会の一つの象徴的な問題として広がっている中、AAがカルト化を自ら防ぎ、AAに多くの回復者がいるという事実がある以上、AAについて考察を深める意義は大きいと言える。

資料1

AAの12ステップ

- 1 われわれはアルコールに対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた。
- 2 われわれは自分より偉大な力が、われわれを正気に戻してくれると信じるようになった。
- 3 われわれの意志といのちの方向を変え、自分で理解している神、ハイヤー・パワーの配慮にゆだねる決心をした。
- 4 探し求め、恐れることなく、生き方の棚卸表を作った。
- 5 神に対し、自分自身に対し、もう一人の人間に対し、自分自身の誤りの正確な本質を認めた。
- 6 これらの性格上の欠点をすべて取り除くことを神にゆだねる心の準備が、完全にできた。
- 7 自分の短所を変えて下さい、と謙虚に神に求めた。
- 8 われわれが傷つけたすべての人の表を作り、そのすべての人たちに埋め合わせをする気持になった。
- 9 その人たち、また他の人びとを傷つけない限り、機会あるたびに直接埋め合わせをした。
- 10 自分の生き方の棚卸しを実行し続け、誤った時は直ちに認めた。
- 11 自分で理解している神との意識的触れ合いを深めるために、神の意志を知り、それだけを行なっていく力を、祈りと黙想によって求めた。
- 12 これらのステップを経た結果、霊的に目覚め、この話をアルコール中毒者に伝え、また自分のあらゆることに、この原理を実践するように努力した。

AAの12の伝統

- 1 第一にすべきは全体の福利である。個人の回復はAAの一体性にかかっている。
- 2 われわれのグループの目的のための最終的権威はただ一つ、グループの良心の中に自分を現される、愛なる神である。われわれのリーダーは奉仕を委された僕（しもべ）にすぎず、彼らは

決して支配しない。

- 3 AAのメンバーであるために要求される唯一のことは、酒をやめたいという願望だけである。
- 4 各グループは完全に自律的でなければならない。ただし、他のグループまたはAA全体に影響をおよぼす事柄においてはこの限りではない。
- 5 各グループの主要目的はただ一つ、まだ苦しんでいるアルコール中毒者にメッセージを運ぶことである。
- 6 AAグループではいかなる関係にある施設にも、外部の企業に対しても、保証や融資やAAの名前を貸すことをしてはならない。金銭や所有権や名声の問題が、われわれを大事な目的からそれさせる恐れがあるからである。
- 7 すべてのAAグループは外部からの寄付を辞退して、自立しなければならない。
- 8 AAはどこまでも非職業的でなければならない。しかし、サービス・センターのようなところでは専従の職員をおくことができる。
- 9 AAそのものは決して組織化されてはならない。しかし、サービスの機関または委員会をつくることはできる。これらの機関は、グループやメンバーからの付託に直接応えるものである。
- 10 AAは外部の問題には意見を持たない。したがって、AAの名は公の論争でひき合いに出されるべきでない。
- 11 われわれの広報活動は宣伝により促進することよりも、ひきつける魅力に基づく。新聞・電波・映画の分野で、われわれはいつも個人名を伏せるべきである。
- 12 無名であることは、われわれの伝統全体の霊的基礎である。それは各個人よりもAAの原理が優先すべきことを、いつも、われわれに思い起させるものである。

資料2

新しい12ステップ (D. ベレンソン)

- 1 私たちの感情と人間関係を支配し操作しようとするれば、無能感と無力感が生まれるということを私たちは知った。
- 2 怒りや痛み、恐れ、恥を自発的に体験しようと思えば、自己非難、罪悪感、自己憐憫から解放され、ハイヤーパワーからの助けが得られることを私たちは理解した。
- 3 私たちは、進んで苦痛に屈服し、その苦痛が平静と思いやり、そして愛、歓び、感謝に変わることに身を委ねた。
- 4 私たちは、自らの力とその限界に遭遇しながら、個人的な方針と性格に関する正直で綿密な目録を作成した。
- 5 私たちは、一人で、時にはハイヤーパワーやほかの人と一緒に、己の行動の、肯定的または否定的な感情的影響を探った。
- 6 私たちは、完全に自分自身を赦す、また赦される用意ができており、自分自身を祝い祝われる用意がある。
- 7 私たちは、自分たちの内面的な発展や肯定的変化を不変のものにするために、ハイヤーパワーに助けを求めた。
- 8 私たちは、自分を傷つけた人、自分が傷つけた人のリストをつくって、前者はすすんで赦し、後者にはすすんで償いたいと思うようになった。
- 9 私たちは、自らの力を取り戻し、人生に対する責任を受け入れた。そして、自分を擁護し、物事をそのまま受け入れ、また直接に償いをした。
- 10 私たちは、自分の感情と他人の感情を尊敬しつつ、自尊心をもって行動し続けた。

- 11 瞑想や祈りを通して、自分自身の運命をつくり、神、女神、「絶対の存在」からその力を得ることを求めた。
- 12 これらのステップを踏んだことによって霊的に目覚め、ほかの人々とこの現実を分かち合いたいと思うようになった。そして、人生のすべての面で霊的な認識を深めたいと思うようになった。

(ベプコ編、1991=1997、pp.89-90)

参考文献

- AA World Services, 1973, *Came to Believe* =1996、AA日本出版局訳 編、『信じるようになった』、AAゼネラルサービスオフィス
- AA J.S.O., 1979, *Alcoholics Anonymous* 無名のアルコール中毒者たち
 ———、1982、AA日本出版局訳 編、『十二のステップと十二の伝統』、AA日本ゼネラルサービスオフィス
- Bateson, G., 1972, *STEPS TO AN ECOLOGY OF MIND*, Harper & Row, Publishers Inc. =1986、1987、佐伯泰樹、佐藤良明、高橋和久訳、『精神の生態学(上)(下)』、思索社
- Bepko, C.(Ed.), 1991, *Feminism and ADDICTION*, The Haworth Press, Inc. =1997、斎藤学訳、『フェミニズムとアディクション —共依存セラピーを見直す—』、日本評論社
- Berenson, D., 1990, *A SYSTEMIC VIEW OF SPIRITUALITY: God and Twelve Step Programs as Resources in Family Therapy*, Journal of Strategic and Systemic Therapies, Vol.9# Spring
- Bjorklund, P., 1983, *What is Spirituality?*, Hazelden Foundation =1998、『霊性とは何か』、みのわマック
- Buxton, M.E., Smith, D.E. & Seymour, R.B., 1987, *Spirituality and Other Points of Resistance to the 12-Step Recovery Process*, Journal of Psychoactive Drugs Vol.19(3), Jul-Sep
- Deleuze, G., 1967, *Présentation de Sacher-Masoch: Le froid et le cruel*, Minuit. =1973、蓮實重彦訳、『マゾッホとサド』、晶文社
- Dumouchel, P./Dupuy, J.-P., 1979, *L'ENFER DES CHOSES*, Editions du Seuil =1990、織田年和、富木茂樹訳、『物の地獄』、法政大学出版局
- Fromm, E., 1941, *ESCAPE FROM FREEDOM*, =1951、日高六郎訳、『自由からの逃走』、東京創元社
- Giddens, A., 1993, *The Transformation of Intimacy; Sexuality, Love, and Eroticism in Modern Societies*, Stanford University Press =1995、松尾精文・松川昭子訳、『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム—』、而立書房
- Girard, R., 1961, *Mensonge romantique et vérité romanesque*, Ed. Bernard Grasset =1971、古田幸男訳、『欲望の現象学』、法政大学出版局
 ———1972, *La violence et la sacré*, Bernard Grasset. =1982、古田幸男訳、『暴力と聖なるもの』、法政大学出版局
 ———1978, *Des choses cachées depuis la fondation du monde*, Ed. Grasset & Fasquelle. =1984、小池健男訳、『世の初めから隠されていること』、法政大学出版局
- Hillman, J., 1983, *ARCHETYPAL PSYCHOLOGY*, Japanese translation rights arranged with Spring Publications, Inc. Dallas, Texas through Japan UNI Agency =1993、河合俊雄訳、『元型的心理学』、青土社
- James, W., 1901-02, *The Varieties of Religious Experience. A Study in Human Nature*, Longmans, Green, and Co, Thirty-Second Impression(1920) =1969-70、榊田啓三郎訳、『宗教的経験の諸相(上)(下)』、岩波書店
- Peteet, J.R., 1993, *A Closer Look at the Role of a Spiritual Approach in Addictions Treatment*, Journal of Substance Abuse, Vol.10
- Schaefer, A.W., 1987, *WHEN SOCIETY BECOMES AN ADDICT*, (Japanese translation rights arranged with Lazear Agency) =1993、斎藤学監訳、『嗜癖する社会』、誠信書房

- Whitfield, C.L., 1987, *Healing The Child Within: Discovery and Recovery for Adult Children of Dysfunctional Families* , Japanese translation rights arranged with Health Communications, Inc. = 斎藤学監訳、鈴木美保子訳、【内なる子供を癒す — アダルトチルドレンの発見と回復—】、誠信書房
- 浅田彰、1985、【ダブル・バインドを超えて】、南想社
- 大澤真幸、1990-1992、【身体の比較社会学Ⅰ・Ⅱ】、勁草書房
- 、1991、【ジェラシーとはなにか】、【思想の科学 No.140 羨望と嫉妬の研究】、思想の科学社
- 岡崎宏樹、1995、【交流の共同体と合一の共同体 — バタイユとジラルの供犠論の比較から—】、【ソシオロジ 第39巻、第3号】、社会学研究会
- 織田年和、1990、【回心と溶解体験—神秘体験の社会学的分析のために—】、【京都産業大学論集 第19巻 第2号】
- 亀山佳明、1988、【自己変容のコミュニケーション—G. ベイトソン・ノート—】、【香川大学一般教育研究 第33号】、1988年3月、香川大学一般教育学部
- 河合隼雄、1997、【「援助交際」というムーブメント】、【世界 第632号 特集 〈生きにくさ〉という問題】、岩波書店
- 鎌原利成、1997、【自虐と依存から自立へ — 近代の強迫的自律のパラドックス—】、【京都社会学年報 第5号】、京都大学文学部社会学研究室
- 斎藤学、1988、【アルコールの物語】、【現代のエスプリ 255 アルコホリクスの物語 どん底から回生への軌跡】、斎藤学編、至文堂
- 、1995a、【共依存とみえない虐待】、【こころの科学 59 依存と虐待】、日本評論社
- 、1995b、【魂の家族を求めて—私のセルフヘルプ・グループ論】
- 、1996、【カルトと自助グループ】、【アルコール依存とアディクション Vol.13 No.3】、家族機能研究所
- 作田啓一、1981、【個人主義の運命—近代小説と社会学】、岩波書店
- 、1988、【ドストエフスキーの世界】、築摩書房
- 、1991、【嫉妬・羨望・憧憬】、【思想の科学 No.140 羨望と嫉妬の研究】、思想の科学社
- 、1993、【生成の社会学をめざして】、有斐閣
- 、1995、【三次元の人間—生成の思想を語る—】、行路社
- 、1996、【一語の辞典 個人】、三省堂
- 竹内芳郎、1986、【具体的経験の哲学】、岩波書店
- 中島道男、1993、【デュルケムと<制度>理論】、【社会学雑誌 第10号】
- 野口裕二、1996、【アルコールリズムの社会学 — アディクションと近代】、日本評論社
- 長谷正人、1991、【悪循環の現象学 — 「行為の意図せざる結果」をめぐって】、ハーベスト社

(かんばら としなり・博士後期課程)

Transcendence and Communality in Spiritual Growth: Recovery from Alcoholism and AA*

Toshinari KAMBARA

In view of many social problems in modern society, it seems necessary to think about spirituality. For example, addiction, such as alcoholism, is a typical spiritual problem. Spirituality stands for one's world view and one's relationship to the world (other people, nature, the universe and the God). Spiritual growth means a process of cognitive changes of one's world view and accompanying ontological changes. How can we relate to the God? How can we relate to other people? How can we transcend totalitarianism? In the recovery process of alcoholics in AA, and in the communality of AA, we find the key to these questions.

In AA, alcoholism is said to be an illness of "will power". Alcoholics separate themselves from their will. And they try to control alcohol, other people and their selves. But to the extent that they try to control alcohol by drinking it, then they can't stop drinking. So, to recover from alcoholism, they must recognize their "powerlessness" to alcohol and surrender themselves to the God (=the Higher Power). Furthermore, AA mustn't be a cult. So AA has norms, the so called "12 traditions". They are for example the following, "the leader mustn't dominate AA", "the only authority in AA is 'the God of love'", "AA mustn't be organized". In this way, through the process of recognition of one's own "powerlessness", the alcoholic becomes humble and more intimate relationships become possible in AA. Spiritual growth means this process.

But we can't be afraid that humbleness may turn into pride, and intimacy may turn mutual violence or codependence. We can't deny that there is a continuity between totalitarianism and intimacy. To maintain spiritual growth, it is important to continue to pray. But, prayer doesn't mean excluding our pride, but accepting that we can't be free from our pride or "will power". Such prayer gives us the humbleness and tolerance to accept ourselves as we are.

In this article, in order to show the difference and the continuity between "the God of violence (=control, will-power)" and "the God of love (=intimacy)", I make use of R.Girard's theory about sacrifice.

(*AA=Alcoholics Anonymous)